



少年誘戯

永井義孝

「ごめん、通して」

野次馬をかき分けて、教室の中を覗く。昼食を食べていたはずのクラスメイトたちも、廊下

放課後を告げるチャイムが鳴る。

普段通りであれば真っ先に教室を出るべくだが、今日ばかりは鞆を持つより先に溜め息が出た。

ピシャンツ!! と激しく耳を劈く雷鳴に、クラスの女子がきやあと悲鳴をあげる。教室中が白んで、一瞬の静寂ののち、誰からともなく「凄かったね」「帰りたくなあい」「やっぱり部活休み?」とお喋りを再開した。

話す相手のいないぼくは、遅れを取り戻すべく鞆をひつつかみ早足で教室を出る。大雨の日の玄関は人で溢れもみくちやにされてしまう。大雨は、――特に、雷が騒がしく明るい雨は一等嫌いだ。人の波も同じくらい嫌いだ。

廊下に出ると、まだ終礼が終わってすぐだというのに、もう人で溢れていた。人の波を縫って階段を駆け下りる。玄関までやって来ている生徒は比較的少なく、安堵しながら上履きから外履きへと履き替えた。

傘立てに置いたはずの濃紺を探す。これだろうか、と手にした傘は持ち手の形が記憶と違い、慌てて元に戻した。ぼくの傘の持ち手はもう少し細い。盗もうとしたわけではないのだ、と誰かに言い訳するみたいに顔をあげると、ぱちりと二つの瞳にぶつかった。

「傘、あった？」

柔らかなような黒髪で、背を伸ばしたぼくの目線より数センチ上にあるはずの大きな瞳。目尻は少し吊っていて、それがセクシーであるとかラスの女子が噂していた。

「し、しぎき、くん」

日に焼けた手が傘立ての上で彷徨っている。

「俺のやつ、ただのビニール傘だから、どれか分らないんだよ」

「……な、なまえ、書けば、いいじゃない、か」

「施設のやつらと共用だから」

「施設名を書けば、いいよ……」

「ああ、頭良いな。そうしてっってお願いしよう」

志崎くんは小学校からの友人だ。おそらく。志崎くんはぼくをそう言うてくれる。ぼくも、そうであるなら嬉しいと思っっている。

だけど今日ばかりは、志崎くんと会いたくなかった。志崎くんと大雨。この組み合わせは、ぼくの苦い思い出を呼び起こす。

「満島の傘はあった？」

「いや、えっと……」

目が滑って探せない。志崎くんも、長い睫毛をはためかせながら、まだ手を彷徨わせていた。しかし傘たちを見比べているフリをしていただけのぼくと違い、きちんと探していたらしい志崎くんは「あ」と声をあげ白い持ち手を掴む。

「あった」

擦り傷のせいかな、透明には見えないビニール傘が引き抜かれていく。それから志崎くんは持ち手をまじまじと見つめた。

「傷がある、これだ」

そう呟くと「じゃあ満島、また明日」と笑って傘立ての前からいなくなっ

た。ぼくは小さな声で「また明日」と返しひと息吐く。傘立ての周りにはいつの間にか人が集まっていたようで、ぼくは明らかに邪魔だった。教室では無色透明のぼくであるが、こんなときばかり有色の人間になるから困る。急いで目当ての濃紺を探し当てた。

靴箱を出る。降り注ぐ大雨を前に、志崎くんがまだ立ち尽くしていた。ぼくが隣に立ったことに気づいたようで、ゆっくりとこちらを見やる。

「満島」

まっすぐと斜め上から見つめられ、どきりとした。志崎くんの手元の傘は、開いているものの骨が折れゆらゆら揺れて、この土砂降りを前にはなんの役にも立たなそうであつた。

「はっ、はい、っていく……?」

「いいの?」

「いい、よ」

たとえ苦い記憶が呼び起こされようと、たった一人の友人くらいには親切でありたい。エゴが勝ってしまうぼくだった。

撫でる。溢れた唾液が志崎くんの中に送り込まれていく淫らに興奮が止まらなくなっていく。

深くまで指を埋めたまま、今度は少しずつナカを揺らす。痛くないように、ぼくを受け入れさせるために広げるのだ。

「はっ、あ、あっ、あ、んっ、んぐっ、みつしま……っ」

「なあに、志崎くん」

「み、ないで……っ、あ、ん、やだ……、んっ、ううっ」

「どうして？ 恥ずかしいの？」

「っ、……、う、あ、っん、ゆらすの、へんな、かんじする……」

「痛い？」

「い、いたくない、ふ、あ……っ、く……、んっ」

でも、と開いた口を食べたくなった。まだ志崎くんが喋っていると言うのに。

「変な、こえ、とまらな、いっ……」

「ぼくはその声、好きだな」

慎重に指を引き抜く。「ひあつ」と甲高い悲鳴にも似た嬌声があがった。

後孔の縁が、ぼくの指の形に沿いながら形を変えている。ずうっとキツく締め付けてくるから、それがよく分かる。キツくて気持ちいいのは変わらないのに、抽挿ははじめよりずっと滑らかに出来るようになっていた。

「増やすね」

もう志崎くんの返事など聞いていなかった。はやく志崎くんのナカに入りたい。痛いほど張り詰めたぼく自身がそれを主張して仕方がないのだ。

三本の指をぐっと押し込む。

「はっ、ぐう……!」

やっぱり、さっきまでよりまたキツくなる。それでも志崎くんの後孔はぼくの指を全部飲み込んでしまった。

深く息を吐いて、浅く吸って、上下する胸は汗が滲んで艶めかしい。ぼくが肌を撫でるとくすぐったそうに身を振った。

指は埋め込んだまま、腸壁を撫でる。腰がかくんと浮いて、萎えてしまった志崎くん自身がふると揺れた。

「あ、っ、んっ、ふ……ッ、う、う、あ、あっ」

「これが痛くなくなったら、ぼくのが入るのかな」

「わ、かんないっ、……あっ、ゆび、まげないで……っ、あ、あっ、だめ、みつしま、」

そう言われたばかりだったのに、ぼくは少しだけ指を曲げたまま引き抜いてしまった。

「ッ……！」

志崎くんの背中が反る。は、と浅く息を吐いて、それからぼくを睨んだ。

「だ、だめって、言ったのに」

「ごめんね、痛かったかな」

「いたく、ないけど、ぞくぞくした……」

志崎くんの手が伸びてきて、後孔に指を埋めた手を掴んだ。少し強引に引きずり出される。自分でやっておいて、きゅっと瞼を閉じなにかに耐えるような表情を作る。

「もういいよ、入るよ、挿れて」